

二〇〇歳を迎えたグリム童話

—その現代における意義—

間宮 史子

グリム兄弟が口伝えの昔話を記録し、『子どもと家庭の昔話集』（グリム童話集）として世に出したのは二〇〇年前のことである。当時彼らは、いま書きとめておかなければ昔話はなくなってしまうだろうと考えていたのであり、『グリム童話集』（以下『童話集』）はいわば、昔話を文字にして保存する試みでもあった。一方、「グリム童話を学術的な昔話集から子どもの本にし」⁽¹⁾、その普及に寄与したのは『グリム童話選集』（以下『選集』）であった。五〇話を収めた『選集』は子どもたちのために編まれ、子どもたちに支持されて版を重ね、グリム童話をドイツの家庭に定着させる土台を築いた。

グリムが『童話集』改版のたびに話のテキストに手を加えていったことは知られているが、『選集』に収められた話についても、やはり手を入れていることがわかっている。私は『選集』に収められた話のテキスト変遷を明らかにしようとして調査を続けてきたが、グリムの改訂の仕方は話によって異なる。本稿では、これまでの調査で明らかになったグリム童話のテキスト変遷を

示しつつ、二〇〇歳を迎えたグリム童話の現代における意義について考えたいと思う。

一．『グリム童話集』と『グリム童話選集』⁽²⁾

『童話集』の初版第一巻（一八一二）と第二巻（一八一五）は、ベルリンのライマー社から各九〇〇部出版されたが、売れ行きはあまり良くなかった。一八一八年の時点で、第一巻はほぼ売り尽くしたが、第二巻はまだ多くが売れ残っていた。一巻二巻を合わせて出した第二版（一八一九）の売れ行きも良くなかった。その後、出版社をグッティンゲンのディーテリヒ社に変え、第三版（一八三七）を出版するまでに約十八年が経過している。

グリム兄弟は、自分たちの『童話集』の売れ行きを妨げる要因を次のように考えた。値段が高いこと、学術的な序文と注釈がつけられていること、口絵以外に挿絵がないこと。さらに、当時だけに増えてきていた本来のメルヒェン（Märchen）

の読者である子どもやその教育者が、神話学的な観点にたつて編まれた『童話集』を敬遠したということもある。

ちょうどそのような時期、一八二三年にイギリスで『グリム童話選集 (German Popular Stories)』が翻訳出版され、わずかな期間に三刷を重ねるといって成功を収める。弁護士のエドガー・テイラーが英訳したグリム童話には、風刺画家ジョージ・クルックシャンクの銅版画がつけられていた。翻訳者から英訳本を受けとった弟のヴィルヘルム・グリムは、その成功に刺激されて、出版社ライマーに『童話集』の選集を出版する考えを伝えている。それは、英訳本と同じように選集版で一卷本とする、小型版の体裁で、できればクリスマスに発売する、挿絵を入れる、値段はなるべく安くする、序文や注釈など、学術的なものはすべて取り除く、というものであった。

こうして、一八二五年十二月に『選集』が刊行された。ヴィルヘルムが『童話集』から選んだ五〇話に、末弟の画家ルートヴィヒ・エーミールによる挿絵が入れられ、全体で三二〇ページ、初版は一五〇〇部だった。挿絵は、「マリアの子」「ヘンゼルとグレーテル」「灰かぶり」「赤ずきん」「いばら姫」「白雪姫」「がちょう番の娘」の七話に一枚ずつつけられた。『選集』はグリム童話の大成功を引き起こした。子どもたちの圧倒的な支持を受けた『選集』は、じきに『童話集』を追い抜いて版を重ねていく。グリム兄弟の生前に、『童話集』が七版を数えたのに対し、『選集』は一〇版を数えた。グリム兄弟生前に出版された『童話集』および『選集』を(表

[表1] グリム兄弟生前に出版された『グリム童話集』および『グリム童話選集』

『グリム童話集』 (Große Ausgabe 大きな版)			『グリム童話選集』 (Kleine Ausgabe 小さな版)		
版	出版年	出版社 (出版地)	版	出版年	出版社 (出版地)
(エーレンベルク手稿 1810)					
1	1812/15	ライマー (ベルリン)			
2	1819	ライマー (ベルリン)			
			1	1825	ライマー (ベルリン)
			2	1833	ライマー (ベルリン)
			3	1836	ライマー (ベルリン)
3	1837	ディーテリッヒ (ゲッティンゲン)			
4	1840	ディーテリッヒ (ゲッティンゲン)	4	1839	ライマー (ベルリン)
			5	1841	[ライマー (ベルリン)]
5	1843	ディーテリッヒ (ゲッティンゲン)			
			6	1844	ベッサー (ベルリン)
			7	1847	ベッサー (ベルリン)
6	1850	ディーテリッヒ (ゲッティンゲン)	8	1850	ドゥンカー (ベルリン)
			9	1853	ドゥンカー (ベルリン)
7	1857	ディーテリッヒ (ゲッティンゲン)			
			10	1858	ドゥンカー (ベルリン)

1』に示す。「表1」をみると、『選集』は『童話集』各版の合間を縫うように出版されていることがわかる。また、『選集』第二版から第九版については、ほぼ二、三年おきに出版されていること、『童話集』第六版と『選集』第八版は同じ一八五〇年に出版されていることがわかる。

二、『グリム童話選集』に収められた話

(一)『選集』に収められた話

『選集』に収める話を選んだのは、ヴィルヘルム・グリムだった。一八一五年に『童話集』初版第二巻が出版されると、兄のヤーコプは弟に『童話集』の仕事をまかせることにしたのである。『選集』のために、ヴィルヘルムは先行する『童話集』第二版(一八一九)より五〇話を選んだ。その際、まず子ども向きと思われる話を選び、そして、すでに人気のある話も考慮に入れた。ヴィルヘルムの選択は、当時の読者の好みに合っただけでなく、それ以降も決定的な影響を及ぼすことになる。よく知られたグリム童話は、例外なくこの『選集』に収められているのである。

『選集』初版に収められた五〇話を(表2)に

〔表2〕『グリム童話選集』に収められた話

選集 No.	童話集 No.	題名	選集 No.	童話集 No.	題名
1	1	蛙の王さま、または鉄のハインリヒ	26	52	つぐみひげの王さま
2	3	マリアの子	27	53	白雪姫
3	4	怖さを習いにでかけた若者の話	28	55	ルンベルシュティルツヒェン
4	5	狼と七匹の子やぎ	29	58	犬と雀
5	6	忠実なヨハネス	30	59	フリーダーとカーターリースヒェン
6	7	うまい商い	31	65	千枚皮
7	9	十二人の兄弟	32	69	ヨリンデとヨリンゲル
8	10	ならずもの	33	83	しあわせハンス
9	11	兄と妹	34	87	貧乏人と金持ち
10	13	森の三人のこびと	35	89	がちょう番の娘
11	14	三人の紡ぎ女	36	94	かしこいお百姓の娘
12	15	ヘンゼルとグレーテル	37	98	もの知り博士
13	19	漁師とその妻	38	102	みそそざいと熊
14	21	灰かぶり	39	104	忠実な動物たち
15	24	ホレばあさん	40	105	ウンケ(蛇あるいはひきがえる)の話
16	25	七羽のからす	41	106	貧しい粉屋の小僧と猫
17	26	赤ずきん	42	110	いばらにとびこんだユダヤ人
18	27	ブレーメンの町楽隊	43	114	かしこいちびの仕立屋
19	34	かしこいエルゼ	44	124	三人兄弟
20	37	親指太郎	45	129	腕利き四人兄弟
21	45	親指小僧の旅修業	46	130	一つ目、二つ目、三つ目
22	46	フィッチャーの鳥	47	135	白い花嫁と黒い花嫁
23	47	ねずの木の話	48	151	ものぐさ三人息子
24	50	いばら姫	49	80	めんどりの死
25	51	みつげ鳥	50	153	星の銀貨

示す。

『童話集』第二版の第一巻から三四話（一～三三番と四九番）、第二巻から一六話（三四～四八番と五〇番）が選ばれ、番号の若い順に並べられていることがわかる。グリム兄弟が『童話集』初版以来「最も古くて最も美しいメルヒェンのひとつ」と尊重して常に一番に置いた「蛙の王さま、または鉄のハインリヒ」から始めて、「星の銀貨」で締めくくっている。「星の銀貨」は、『選集』の最後に置かれたことで特に人気がでた。唯一、番号順でないのが「めんどりの死」（『童話集』八〇番）で、四九番に置かれた。ヴァイルヘルムがこれを『選集』の最後から二番目に置いた理由は明らかではないが、この話が累積譚であることから、できるだけ最後に置こうとしたのではないかと考えられる。五〇話のうち、三九番「忠実な動物たち」が第九版（一八五三）以降「かしこい人々」（『童話集』一〇四番）に、また、四四番「三人兄弟」が第二版（一八三三）以降「雪白とばら紅」（『童話集』一六一番）に入れ換えられたが、それ以外の話は変わらなかった。

（二）『選集』に収められた話の出自

グリム童話の語り手や提供者は、大体次の五つに分けられる。『選集』に収められた話について、該当する番号を（ ）内に示す。入れ換えられた三九番と四四番については、入れ換え前後の各話を前、後であらわす。二話からなる一七番の各話

は（一）（二）、三話からなる四〇番の各話はIⅡⅢであらわす。これらの話を含めると、総話数は五五話となる。一話に複数の提供者がいる場合があることをつけ加えておく。

①初期の語り手たち（都市の中・上流階級に属すヴァイルト家やハッセンプフルーク家の若い娘たち） 二〇話（三六％）

ヴァイルト家 一二話（一、二、一〇、一二、一五、三二、二六、二八、二九、三一、三九後、四〇I／三二％）、ハッセンプフルーク家 一話（四、九、一〇、一六、一七（一）、一七（二）、二二、二四、二六、二七、二八／二〇％）

②個々の語り手・提供者たち（牧師の娘や退役軍人など） 一六話（二九％）

ズイーベルト 五話（三、三四、三九前、四三、四四前）、ルンゲ 二話（二三、二三）、シュタイン 二話（一四、二七）、マシネル 二話（二二、二五）、ラムス姉妹 一話（七）、ヴァイガント 一話（二）、マールブルクの老婆 一話（一四）、ゴルトマン 一話（一五）、グローテ 一話（二〇）、エンゲルハルト 一話（四九）

③フイーマン夫人 一二話（三、五、一〇、一四、一九、二九、三〇、三五、三六、三七、三八、四一／三二％）

④ハクストハウゼン家 七話（六、八、一八、二二、二六、四五、四七／二三％）

⑤本から採られた話 八話（二五％）
古い本 二話（四二、四八）、同時代（十八世紀後半～十九世

紀前半)の本 六話(三二、三三、四四後、四六、四九、五〇)

その他、①～⑤以外が七話(三一、一六、二〇、三〇、四〇Ⅱ、四〇Ⅲ、四七)。

(三)『選集』初版と第一〇版のテキスト変更のレベルとその出自との関係

グリム、特に弟のヴィルヘルムが、改版に際して『童話集』だけでなく『選集』の話についても手を入れていることは先に述べた。そこで、『選集』に収められた話のテキストがどの程度変更されているのかをみるために、各話について、『選集』初版(一八二五)と第一〇版(一八五八)のテキストを比較した⁽³⁾。その結果、テキスト変更のレベルが高い順にレベル五～〇に分け、各レベルに該当する話とその出自を示したのが「表3」である。レベル五は、全体的にテキストが膨らみ、それに伴う変更・加筆がされている場合で、五話(一、四、一二、一三、四〇Ⅰ)が該当する。これらの出自をみると、前項(二)で分けた、①初期の語り手たちが四話(一、四、一二、四〇Ⅰ)を占め、②個々の語り

〔表3〕『グリム童話選集』初版(1825)と第10版(1858)のテキスト変更のレベルとその出自との関係

レベル	話数	該当話の番号と題名(出自)
5	5	1 蛙の王さま、または鉄のハイブリヒ(ヴィルト家) 4 狼と七匹の子やぎ(ハッセンプフルーク家) 12 ヘンゼルとグレーテル(ヴィルト家) 13 漁師とその妻(ルンゲ) 40 I 蛇の話(ドルトヒェン・ヴィルト+リゼット・ヴィルト) ①② ③④⑤なし
		2 マリアの子(グレートヒェン・ヴィルト) 14 灰かぶり(マールブルクの老婆+フィーマン+シュタイン) 24 いばら姫(マリー・ハッセンプフルーク) 45 腕利き四人兄弟(ハクストハウゼン家) ①②③④ ⑤なし
4	4	3 怖さを習いにでかけた若者の話(ズィーベルト+フィーマン他) 22 フィッチャーの鳥(マンネル+ドルトヒェン・ヴィルト) 27 白雪姫(マリー・ハッセンプフルーク+シュタイン) 34 貧乏人と金持ち(ズィーベルト) 35 がちょう番の娘(フィーマン) 41 貧しい粉屋の小僧と猫(フィーマン) ①②③ ④⑤なし
		いくらかの変更・加筆がされている
3	6	17 ②赤ずきん(マリー・ハッセンプフルーク) 19 かしこいエルゼ(フィーマン) 23 ねずの木の話(ルンゲ) 25 みつけ鳥(マンネル) 32 ヨリンデとヨリンゲル(シュティリングの本) 40 III ウンケの話(ベルリンの話) 48 ものぐさ三人息子(パウリの本) ①②③⑤ ④なし
		部分的にめだつ変更・加筆がされている
2	31	①②③④⑤
1	7	39 後かしこい人々(ドルトヒェン・グリム)
		僅かな変更がされている以外ほとんど変更なし
0	1	表記上の変更以外変更なし

手・提供者たちが一話（二二）である。③ワイーマン夫人、④ハクストハウゼン家、⑤本から採られた話は、レベル五にはない。

レベル四は、全体的に変更・加筆がされている場合で、四話（二、一四、二四、四五）が該当する。これらの出自は、①が一話（二、二四）、②が一話（一四）、③が一話（二四）、④が一話（四五）であり、⑤はない。

レベル三は、部分的にめだつ変更・加筆がされている場合で、六話（三、二二、二七、三四、三五、四一）が該当する。これらの出自をみると、②が四話（三、二二、二七、三四）、③が三話（三、三五、四一）、①が一話（二二、二七）で、④と⑤はない。

ひとつとんで、レベル一は、僅かな変更がされている以外ほとんど変更がない場合で、七話（二七（二）、一九、二三、二五、三二、四〇Ⅲ、四八）が該当する。これらの出自は、②が二話（二三、二五）、⑤が二話（三三、四八）、①が一話（二七（二））、③が一話（一九）、その他一話（四〇Ⅲ）であり、④はない。

レベル〇は、表記上の変更以外変更がない場合で、一話（三九後、出自①）のみが該当する。もともと、これは第九版（一八五三）で三九前と入れ換えられた話である。

そして、レベル二は、いくらかの変更・加筆がされている場合で、レベル五、四、三、一、〇に入らない三一話が該当する。これらの話の出自は、①②③④⑤すべてである。

つまり、変更レベルの違いはあるものの、グリムがほぼすべての話に手を入れていることがわかる。レベル〇とレベル一を

除くと、五四話のうち四六話（八五％）に、なんらかの変更がされている。

さらに、変更レベルと話の出自との間にも関係がある。①初期の語り手たち及び②個々の語り手・提供者たちの話は、レベル五、四、三に多い。これに対して、③ワイーマン夫人の話はレベル三にめだつ。グリム兄弟はワイーマン夫人の語りを高く評価し、最初に採用したテキストにほとんど手を加えていないが、それでも部分的な変更・加筆を行なった話があるということである。④ハクストハウゼン家の話は、レベル四に一話あるものの、レベル五、三にはないことから、あまり手を入れられていないことがわかる。⑤本から採られた話についても、レベル五、四、三にはみられないため、あまり変更されていないといえる。

三. グリム童話のテキスト変遷

それでは、『童話集』と『選集』のテキストはどう改訂されていたのだろうか。私がこれまで「灰かぶり」「赤ずきん」「フィッチャーの鳥」「いばら姫」「蛇の話」「貧しい粉屋の小僧と猫」「腕利き四人兄弟」の七話について調査したところ、グリムの改訂の仕方は話によって異なるものの、いくつかの共通点と傾向をみいだすことができる。

調査方法について。各話を段落に分け、『童話集』『選集』各版の同じ段落を出版年順に並べて比較し、その結果をもとにテク

スト変遷図を作成した。ただし、『選集』第五版（二八四二）については、その所在が現在もわからないため除く。テキスト各版は、『童話集』『選集』をそれぞれ、ドイツ語の Große Ausgabe、Kleine Ausgabe の頭文字 G、K であらわし、第何版かをその次にくる数字であらわす。本文中では、それに続けて出版年を（）内に示す。つまり、『童話集』初版は G 一（一八一二）、『選集』初版は K 一（一八二五）ということになる。図において、矢印はその方向へ変移、破線矢印はその方向へ影響を及ぼした可能性、等号は同一、不等号は非同一、アステリクスは特に加筆がめだつ版を示している。以下、調査済みの七話のテキスト変遷を示し、変更や加筆がめだつ版について指摘する。

(一)「灰かぶり」〔童話集〕二二番／『選集』一四番、レベル四、出自②③⁵⁾。テキスト変遷は図1に示す。

G 二（一八一九）：フイーマンとシユタインによる二類話と合成され、大幅に変更され整えられる。K 四（一八三九）：継母の悪さを強調する灰かぶりに対する罵りことばや行為、灰かぶりが王子から逃げる様子、王子が策略を用いたこと、灰かぶりが残した靴の描写、足を切って靴を履いた姉妹が痛みをこらえる様子などが加わる。K 七（一八四七）：実母の死後、時が過ぎたことを示すための季節をあらわすことが加筆され、継母とその娘たちの悪さを強調する、罵りことばの書き換えと行為の加筆がある。G 六（一八五〇）／K 八（一八五〇）：継母たちの悪さをあらわす表現がさらに変更・強調され、灰かぶり

が王子に再確認される場面の描写が増える。

(二)「赤ずきん」〔童話集〕二六番（一）／『選集』一七番（一）、レベル二、出自①⁶⁾。テキスト変遷は図2に示す。

G 二（一八一九）：書き換えと加筆がされて形が整う。G 四（一八四〇）：狼や狩人のせりふが書き換えられ、狼の悪さが強調される。救出されたおばあさんの衰弱した様子が加わる。K 六（一八四四）、K 七（一八四七）：狼の悪さを強調する表現や母親の赤ずきんに対する注意の書き換えがある。G 六（一八五〇）：さらに、狼の悪さを強調する書き換え、母親の赤ずきんへの注意が加筆される。

(三)「フイッチャーの鳥」〔童話集〕四六番／『選集』二二番、レベル三、出自①②⁷⁾。テキスト変遷は図3に示す。

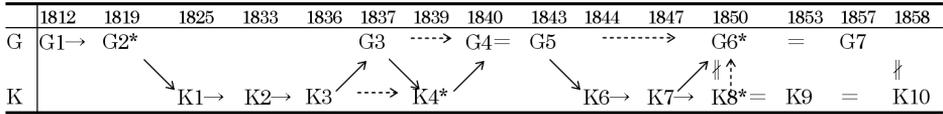
G 二（一八一九）：全体に渡って加筆、改筆される。K 二（一八三三）：末娘に魔術師を悪者と言わせる。K 八（一八五〇）：末娘は「卵を箱に入れてその箱に鍵をかけ」とする。G 六（一八五〇）：末娘は「卵をきちんとしまい」とする。次女が血の部屋を開けた理由、長女と次女が切り刻まれていたこと、しゃれこうべに花輪、などが加筆される。K 九（一八五三）：魔術師の家の部屋の豪華な様子、それを見た長女の心の動き、殺害道具、魔術師が末娘に従う理由が加筆される。魔術師の行為がより乱暴に書き換えられる。

(四)「いばら姫」〔童話集〕五〇番／『選集』二四番、レベル四、出自①⁸⁾。テキスト変遷は図4に示す。この話は、一八一〇

調査済みの7話のテキスト変遷

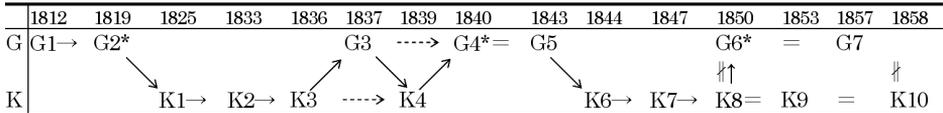
図において、「→」はその方向へ変移、「→」はその方向へ影響を及ぼした可能性、「=」は同一、「≠」は非同一、「*」は特に加筆がめだつ版を示す。

〔図1〕「灰かぶり」(『童話集』21番／『選集』14番、レベル4、出自②③)



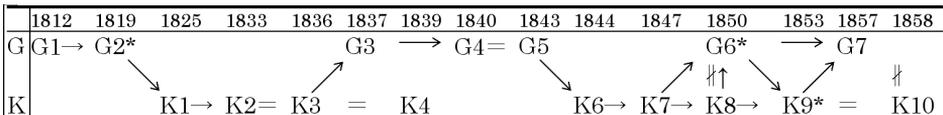
Grafik: KHM 21

〔図2〕「赤ずきん」(『童話集』26番(1)／『選集』17番(1)、レベル2、出自①)



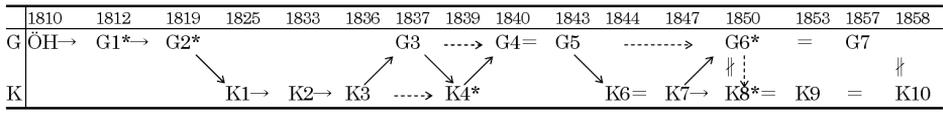
Grafik: KHM 26

〔図3〕「フィッチャーの鳥」(『童話集』46番／『選集』22番、レベル3、出自①②)



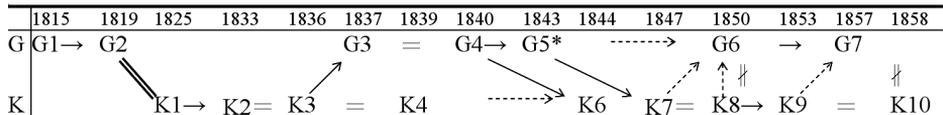
Grafik: KHM 46

〔図4〕「いばら姫」(『童話集』50番／『選集』24番、レベル4、出自①)



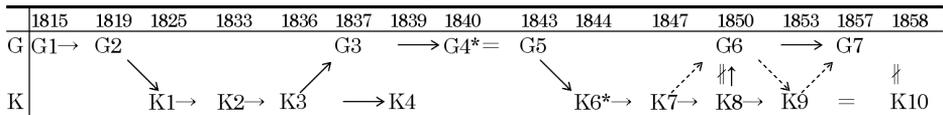
Grafik: KHM 50

〔図5〕「蛇の話」(『童話集』105番I／『選集』40番I、レベル5、出自①)



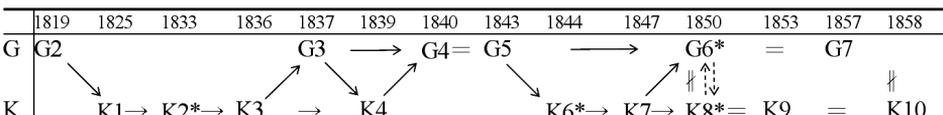
Grafik: KHM 105

〔図6〕「貧しい粉屋の小僧と猫」(『童話集』106番／『選集』41番、レベル3、出自③)



Grafik: KHM 106

〔図7〕「腕利き四人兄弟」(『童話集』129番／『選集』45番、レベル4、出自④)



Grafik: KHM 129

年のエーレンベルク手稿(ÖH)から存在する。

G一(一八一二) : 加筆され具体的に、特に後半が膨らむ。G二(一八一九) : 全体的に書き換えと加筆がされる。K一(一八二五) : 予言動物がざりがにから蛙に変更される。K四(一八三九) : 一三番目の女の悪さを強調する描写、王女の眠りが城全体に広がる描写が加わる。G六(一八五〇) / K八(一八五〇) : 王女は「そこにあつたベッドの上へ」倒れたという説明や、やってきた王子たちが死んでいった様子など、状況描写がさらに増える。

(五)「蛇の話」〔『童話集』一〇五番I / 『選集』四〇番I、レベル五、出自①〕⁹⁾ テキスト変遷は図5に示す。

G五(一八四三) : 大幅な加筆と改筆がされる。子どもの蛇への韻文の呼びかけや、蛇が感謝のしるしに子どもに宝物を持ってきたこと、また、子どもの様子が変わって赤い頬を失ったこと、まもなく夜、死を告げる鳥が鳴きはじめ、コマドリが葬式の花輪のために小枝や葉を集めたことが書き足される。コマドリの文については、ビュッシングの『民間伝説、メルヒェン、聖者伝』(一八一二)の「コマドリの話」から採用されたことが明らかになっている。

(六)「貧しい粉屋の小僧と猫」〔『童話集』一〇六番 / 『選集』四一番、レベル三、出自③〕¹⁰⁾ テキスト変遷は図6に示す。

G四(一八四〇) : 魔法にかけられた猫の城の様子が加筆される。K六(一八四四) : 登場人物の感情をあらわすせりふ、

合理的説明が加筆される。G六(一八五〇) : 城で音楽を奏でる猫が二匹から三匹へ変更される。

(七)「腕利き四人兄弟」〔『童話集』一二九番 / 『選集』四五番、レベル四、出自④〕¹¹⁾ テキスト変遷は図7に示す。この話はG二(一八一九)から収められた。

K二(一八三三) : 全体に渡って加筆・改筆がされる。K六(一八四四) : 狩人が一発で五つの卵を撃ちぬいた理由、父親のせりふ、竜が落ちてきて船が壊れる箇所に「再び大変な災難だった」という描写が加わる。G六(一八五〇) / K八(一八五〇) : 父親の感情の加筆、父親のせりふ「認めなければならぬ」が慣用句を使用した表現に変更される。

これら調査済みの七話に共通するのは次の四点である。

① K九(一八五三)とK一〇(一八五八)のテキストは同一である。
② 同年に出版されたG六(一八五〇)とK八(一八五〇)のテキストは同一ではない。

③ 『童話集』『選集』の最終版である、G七(一八五七)とK一〇(一八五八)のテキストは同一ではない。

④ 後の版にいくほど、話の筋には直接関係のない、登場人物の感情、敵対者の悪さや恐ろしさを強調する描写、合理的説明や状況描写が増える。

また、「蛇の話」を除いた六話に共通するのは次の二点である。

① G四(一八四〇)とG五(一八四三)のテキストは同一である。
② テキストは、G二(一八一九)で整えられ、その後二回にわ

たつて、めだつた加筆や改筆がされている。ただし、「貧しい粉屋の小僧と猫」のG二(一八一九)はこれに該当しない。また、「腕利き四人兄弟」はG二(二八一九)から『童話集』に収められたため、まずK二(一八三三)でテキストが全体にわたつて加筆・改筆され、その後二回めだつた改訂がされている。

さらに、子どものための『選集』に特徴的な変更や加筆といえるものは認められないので、改訂に際して『童話集』と『選集』は同等に扱われたと考えられる。

グリム童話のテキスト変遷を明らかにすることは、グリムの再話の仕方を明らかにすることである。今後ほかの話についても調査が進めば、その全体像が明らかになるだろう。

四. 「おはなし会」で語られるグリム童話

再話昔話であるグリム童話は世界中に普及し、広く知られることになった。現代の日本においても、グリム童話は読まれるだけでなく、「おはなし会」で好んで語られる昔話となっている。¹³⁾

二〇一二年には、グリム童話誕生二〇〇年、また、小澤俊夫主宰の昔ばなし大学創立二〇周年を記念して、日本各地で「グリム童話を語る会」が開催された。そこではどのようなグリム童話が語られたのだろうか。プログラムを入手できた四〇か所¹⁴⁾について、語られたグリム童話を集計したところ、次のような結果になった。上位一五位までを示す。

- ① 「狼と7匹の子やぎ」二五回、② 「赤ずきん」二四回、③ 「おいしいおかゆ」二二回、④ 「こびとと靴屋」一八回、⑤ 「ホレばあさん」「七羽のからす」「ルンペルシュティルツヒェン」各一五回、⑥ 「ラプンツェル」一二回、⑦ 「蛙の王様」「ブレーメンの町楽隊」「星の銀貨」各一〇回、⑧ 「いはら姫」九回、⑨ 「三人の紡ぎ女」「みつげ鳥」「賢いグレーテル」各八回

これを見ると、『童話集』第一巻に収められた話が多いことがわかる。「おいしいおかゆ」「星の銀貨」以外はすべてそうである。また、「おいしいおかゆ」「こびとと靴屋」「ラプンツェル」「賢いグレーテル」の四話以外は、『選集』にも収められた話である。

現代の語り手はグリム童話を覚えて語るわけだが、どんなテキストを使用するのだろうか。グリム童話の日本語訳は数多く存在するが、語るためのテキストとして翻訳本を使用することには問題があった。日本でも『童話集』最終版である第七版(一八五七)の翻訳が普及しているが、改版のたびに手を加えられて「読む昔話」となったテキストは、覚えて語るには不向きなのである。

「グリム童話を語る会」のプログラムには、グリム童話の題名と使用テキストが併記してあることが多い。それを見ると、主にあげられているのは次の三つである。

『おはなしのろうそく』一―二八 一九七三―二〇一一 東京子ども図書館

『子どもに語るグリムの昔話』全六巻 佐々梨代子・野村法訳
一九九〇―一九九三 こぐま社

『語るためのグリム童話』全七巻 小澤俊夫監訳 小澤昔ばなし
研究所再話 二〇〇七 小峰書店

紙数の制約のため詳述はできないが、これらに共通するのは、「読むため」ではなく「語るため」「聞くため」のグリム童話のテキストであるということである。

五. 現代におけるグリム童話の意義

グリム童話の普及に大きな役割を果たした『グリム童話選集』に焦点をあてつつ、グリム童話の『童話集』『選集』におけるテキスト変遷、つまりグリムの再話の仕方について述べてきた。ヴイルヘルム・グリムは昔話のスタイルを作りあげるため、本になった昔話、つまり「書かれた昔話」のテキストを改訂していった。その結果、「聞く昔話」が「読む昔話」に姿を変えていったのは当然のことだといえる。しかしだからこそ、グリム童話は世界中に普及し、広く知られることになった。注目すべきなのは、「読む昔話」として再話されたグリム童話が、今日好んで語られるようになってきていることである。グリム童話の魅力、その物語の力が、語られることでより直接人の心に届くということであれば、これは「語る昔話」「聞く昔話」としてのグリム童話の再発見といえるだろう。

昔話を文字にして保存する試みでもあった『グリム童話集』は、昔話研究の端緒をひらいただけではない。再話昔話として

のグリム童話は、現代の私たちが昔話をどのように伝承していくかという点についても重要な手がかりを与えてくれる。

付記 本稿は、二〇一三年六月一日に日本口承文芸学会第三七回大会で行なった講演内容をもとに加筆修正したものである。

注

- (1) Denecke, 1971: 69.
- (2) 一および二の(一)については、問宮、一九九四・七九―九二。
- (3) 入れ換えられた二話については、三九前は初版(一八二五)と第八版(一八五〇)を、三九後は第九版(一八五三)と第一〇版(一八五八)を、また、四四後は第二版(一八三三)と第一〇版(一八五八)を比較した。四四前は初版のみで除くため、ここでの総話数は五四話である。
- (4) 小澤、一九九二・一九九九を参照。
- (5) 問宮、二〇〇二a: 二九―四三。
- (6) Mamiya, 1999: 52-63.
- (7) 問宮、二〇〇五: 六五―七九。
- (8) 問宮、二〇〇二b: 八五―九九。
- (9) Mamiya, 2007: 1(362)―10(353). (日本語要旨: 11(352)―12(351))
- (10) 問宮、二〇〇三: 一―一〇。

- (11) 間宮、二〇二二：二一九。
- (12) たとえば、『伝え』第五二号（二〇二二）の杉浦邦子『おはなし会』で語られるグリムの昔話などを参照。
- (13) このうち、三か所（東京都北区、東京都調布市、神奈川県横浜浜市）については自身で聞く機会があった。
- 引用・参考文献
- 小澤俊夫『グリム童話の誕生 聞くメルヒェンから読むメルヒェンへ』一九九二 朝日新聞社
- 小澤俊夫『グリム童話考』一九九九 講談社（復刻版 二〇一三 小澤昔ばなし研究所）
- 間宮史子『Kleine Ausgabe der Kinder- und Hausmärchen —その成り立ち、構成、特徴—』"Rhodus. Zeitschrift für Germanistik" Nr. 10 一九九四
- 間宮史子『「灰かぶり」のテキスト変遷—『グリム童話集』『グリム童話選集』のテキスト分析—』『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』VI 二〇〇二（二〇〇二a）
- 間宮史子『「いばら姫」のテキスト変遷—『グリム童話集』『グリム童話選集』のテキスト分析—』小澤俊夫教授古稀記念論文集編集委員会編『昔話研究の地平 小澤俊夫教授古稀記念論文集』二〇〇二（二〇〇二b）
- 間宮史子『「貧しい粉屋の小僧と猫」のテキスト変遷—『グリム童話集』『グリム童話選集』のテキスト分析—』『白百合女子

- 子大学児童文化研究センター研究論文集』VII 二〇〇三
- 間宮史子『フィッチャーの鳥』のテキスト変遷—『グリム童話集』『グリム童話選集』のテキスト分析—』『口承文藝研究』二八 二〇〇五
- 間宮史子『白雪姫はなぐられて生き返った—グリム童話 初版と第二版の比較—』二〇〇七 小澤昔ばなし研究所
- 間宮史子『腕利き4人兄弟』のテキスト変遷—『グリム童話集』『グリム童話選集』のテキスト分析—』『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』XV 二〇一三
- Denecke, Ludwig: Jakob Grimm und sein Brüder Wilhelm. Stuttgart (Metzler) 1971.
- Mamiya, Fumiko: Textveränderungen der Kleinen Ausgabe der Kinder- und Hausmärchen (KHM) der Brüder Grimm. Rotkäppchen (KHM 26). In: Doitsu Bungaku, 102 (1999), S. 52—63
- Mamiya, Fumiko: Die Textveränderung von KHM 105 (1) "Märchen von der Unke". Textanalysen der Großen und der Kleinen Ausgaben der *Kinder- und Hausmärchen* der Brüder Grimm. In: Aspects of Folklore Research: Festschrift in Honor of Professor Toshio Ozawa for his 77th Birthday. Tokyo (DOYO-KAI) 2007, S. 1 (362)–10 (353). (『昔話研究』S 諸相 小澤俊夫教授喜寿記念論文集) 昔話研究 土曜会 (まみや・ふみこ／白百合女子大学)